

いた。これまでの霊長類における深指伸筋の調査では、ワオキツネザルでは第1~3指に見られ、各指とも2つの小筋束とその停止腱が観察された。ニホンザルでは第1~3指に見られたが、第1指は長母指伸筋として独立し、第2,3指の深指伸筋は一体の筋腹からの各腱として第2,3指に終わっていた。ヒトでは深指伸筋として一般に、長母指伸筋と示指伸筋がそれぞれ単腱にて認められる。しかし、変異として、第3指に停止する深指伸筋、各指の伸筋に筋束や腱の重複化や、短指伸筋化した筋束が観察された。以上の所見から、深指伸筋の分化は霊長類の系統発生において1)尺側の指の深指伸筋から単純化あるいは消失する傾向にある。2)ヒトにおいて確認された深指伸筋系の変異型は霊長類各種に見出される伸筋の出現形態に類似することが明らかになった。

計画 5-1 丹沢東北山塊におけるニホンザルの生息と人間活動の影響

福田史夫 (共立薬大)

丹沢東北山塊 (神奈川県津久井町) には、周年を通して農耕地に出没する群れと全く農耕地には出没しないで山地で生活している群れが存在する。農耕地に出没する群れ (南山群) は、20年以上前には秋には農耕地・集落周辺に植栽されているカキの実を採ることが知られていた。当時は住民の姿を見ればすぐ逃げたようだ。しかし、1970年代に入ってから進められた宮ヶ瀬ダム工事により生息域の南部が狭められたため、80年代後半には津久井町鳥屋地区の分断するように走る県道を渡って北西の仙洞寺山の方まで行動域を拡大し始めた。このため、農業被害が日常化した。と同時に個体数も増加し始めた。さらに、市街化区域であるため銃器を用いての追い払いができないため、人を恐れなくなった状態が続いている。一方、その西の隣接群とも言える馬の背群は、彼等の行動域の東方 500mには人家や農地もあるが、まったく猿害をおこなさないばかりか、人に出会えばすぐ警戒音を発して逃げてしまう。この群れの接近オスの中には南山群に追従して水田で稲を食べていた個体さえ存在するのである。

これら2群の人や農作物に対する行動上の大きな違いは、彼等の生息域内が猟区であるか否かに基づいていると確信される。

計画 5-2 白神山地におけるニホンザルの群れ分布の把握

揚妻直樹 (北海道大
・北方生物圏・苫小牧研究林)

2001年12月に主に秋田県側白神山地の9市町村に

おいてルートセンサスを行い、サルおよび雪上の足跡の発見に努めた。サルおよび足跡を発見した場合にはその日時と場所を記録した。調査地には3群のサルに発信機がついていたので、これらについては、テレメトリー法による位置探査も行った。その結果、サルを12回直接観察し、サルの足跡を67箇所で見ることができた。このうち、複数頭および複数列の足跡が48例あった。また、テレメトリー法により、群れの位置を17回探査した。複数頭であった場合をサルの集団とみなし、隣接して得られた集団の情報については、同じ日の情報では1km以上、1日隔たった情報では2km以上、2日隔たって情報では4km以上、3日以上隔たった情報では5km以上離れていた場合、それらは異なる集団の情報であると判断した。この基準に照らすと、調査地域には21集団が生息していることが示唆された。このうち11集団については集団サイズや未成熟個体の存在から群れであると考えられた。集団情報が得られた地点を最外郭で囲み、そこから青森県部分と海岸部を差し引いて生息地面積を求めたところ316km²となった。前年12月に行った同様の調査結果とあわせて分析したところ、秋田県側白神山地に生息するサル集団数は29-35集団 (そのうち少なくとも7割は群れ) であり、生息地面積は最外郭法で518km²と推定された。

計画 5-3 屋久島の永田地区周辺のニホンザルの猿害群の採食生態

デビッド=ヒル (京都大・理
・招へい外国人学者)

屋久島では集落周辺の柑橘類果樹園での収穫期の猿害が深刻であるが、猿害のない時期の加害群の生態については、ほとんど知られていない。本研究は、集落周辺のサルの自然食物植物の利用可能性と、調査地域で遭遇するサルの群れの構成、行動や食性や利用地域についての猿害群の生態について明らかにすることを目的とした。本年度は計画の2年目にあたる。

2001年の7月と8月の非収穫期に、収穫期には猿害の激しい永田集落周辺で、森林での自然のサルの食物の利用可能性を調査した。集落と果樹園や二次林の間のおおる道路3.3kmの区間で、道路の両側の植生を、100mごとに33区画分記録した。同じ区間で10時から12時までサルを探索した。25m幅の区画を10区画えらび、二次林内のサルの食物種の植物の密度調査をした。その結果、二次林は半分以上の区画に自然回復中の森として普通にあり、成熟した二次植生を支えていること、また、畑と果樹園が二次林について頻度が高いこと、サルの活動の証拠は、アカメガシワの種子食で、12調査日のうち10日間確認した。直接観察からは、永田川をはさんで、両

側に一群ずつのサルを確認した。道路周辺の75%の植物個体は、サルの食物と確認されている種類だった。したがって、サルは、猿害期以外でも果樹園周辺に存在し、自然食物が農道周辺にあることが確認された。この結果は、猿害群の生態についての、より規模の大きな研究のための基礎となる。来年度は植生調査をさらにすすめ、集落周辺でのサルの活動と自然食物の利用可能性の周年性について検討する予定である。

計画 5-4 中国地方東部におけるニホンザル地域個体群の分布調査

渡邊義雄(美作女子大)・林 勝治(広島県大)

中国地方東部において、ニホンザルの分布調査を行った。岡山県では、群れの生息が確認されている、井原市、芳井町、備中町、哲西町、高梁市、北房町、落合町、美甘村、新庄村の9市町村で聞き取り調査を行った。これまでより、群れの生息域が明確になった。また、広島県との県境を越えて生息している集団も確認できた。しかし、どの集団も直接観察による確認はできていないので、個体数は明らかでない。推定では、岡山県内に22集団800頭余りが生息していると思われる。今年度までの調査で、県内のほとんどの地域を調査できた。未調査の地域に関しても、繁殖集団の生息はほとんど見込めない。主な生息地は捉えられたと思われる。岡山県では、集団の生息地は県西部に偏っていることが分かった。

聞き取り調査では、岡山県内でもサルによる農作物への被害が増えている。被害の多い高梁・井笠・阿新・東備の各振興局に被害対策について問い合わせたところ、具体的な計画は立てられていないようだった。一方、真庭振興局管内の落合町、美甘村、新庄村地域では農作物被害への対策が進められており、これから地元民の協力によりサルの行動域の情報も集められると思われる。

計画 5-5 中高度域におけるヤクシマザル調査法の検討と人口学的資料の収集

好廣眞一(龍谷大・経営)
・大竹勝(犬山市・愛知)

1998年より、屋久島西部、瀬切川・大川流域の照葉樹林・ヤクスギ林移行帯にすむヤクシマザルを継続調査し、個体群動態のメカニズム解明を試みている。2001年8月5日～16日に、標高850-1350mの7.5km²の地域を、ブロック分割定点調査法を用いて調査した。

調査域に12・13群が出現し、うち4群と今年新たにBR群の計5群を識別した。5群のうち、HR群は全頭個体識別されている。PE群とOM群は、集団(近接して一緒に遊動しているサルの集まり)の全数カウント数が複数

あり、SY群とBR群は集団のほぼ全数のカウントが得られた。5群の個体数、新生児数、オトナメス数は次のとおりであった。HR群:24, 2, 9。PE群:14, 0, 5。OM群:12, 2, 5。SY群:17, 1, 6。BR群:24, 4, 8。5群の新生児数は計9頭で、オトナメス数33頭の27%であった。

計画 5-6 黒部川流域に生息するニホンザル地域個体群の動態(ダム建設に伴う遊動域の変動)

加藤 満(愛知県立瀬戸高)

富山県宇奈月町の黒部川流域に生息するニホンザル自然群を対象にして、ダム建設に伴う遊動域の変動を調査した。

99年10月にダムの貯水が始まって約2年が経過し、最も影響を受けたON群、MO群、MT群3群はホームレンジをダムの下流域へと拡大させてきた。今年度の調査ではMO群のホームレンジは前年度とほぼ変わらなかったが、MT群は1800m、ON群は7000m下流域へホームレンジを拡大させた。このMT群とON群の下流域への遊動は冬期に観察された。特にON群のホームレンジは、この大きな移動によりこれまで最下流に位置していたOHA群を越えて、黒部川最下流に位置することになった。

ダムの貯水以降、これら3群の黒部川に沿った下降は、MO群が0.4km、MT群が3km、ON群が10kmである。ON群のホームレンジが下流側へ拡張すると同時に、上流側に位置していたMO群とMT群も下流側へとホームレンジを広げ、黒部川支流の谷のススキ原では採食地をめぐる群れどうしの競合関係が見られるようになっていた。昨年度報告したダムの上流部から下降してきた2つの群れも今年度の冬期調査でダムの中央部で確認された。このように、上流域でのダム建設が、その周辺に生息する群れの下流域への移動を促し、下流側に隣接して分布するON群が下流方向へ大きく移動する原因になっているものと思われる。

計画 5-7 青森県下北郡佐井村に生息する野生ニホンザルの生態調査と保護管理

鈴木克哉(北海道大・文)

本研究では青森県下北半島佐井村に生息し、農業被害を起こすニホンザルY群を対象に農地利用の状況と地域の主な対策法である電気柵の効果について検証した。調査は01年の6, 7, 8, 10, 11月に群れを連続追跡し、15分ごとの位置をポイントデータとしてGISソフトArcviewで分析した。群れの広がりやを考慮して実際の農地に50mのバッファをかけ「農地」とした。

群れは昨年までの行動域を大きく南北に拡大させ、